

氏名（本籍）	上野耕平
学位の種類	博士（体育科学）
学位記番号	博乙第 2727 号
学位授与年月	平成 27 年 2 月 28 日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	運動部員が獲得している競技状況スキルの

ライフスキルへの般化

主査	筑波大学教授	博士（体育科学）	中込四郎
副査	筑波大学教授	博士（心理学）	坂入洋右
副査	筑波大学教授	博士（医学）	野津有司
副査	筑波大学教授	博士（心理学）	沢宮容子
副査	筑波大学准教授	博士（心理学）	湯川進太郎

論文の内容の要旨

1. 論文の目的

本論文は「運動部活動への参加を通じて生徒は何を獲得し、それは彼らの現在及び将来においてどのような役割を果たすのか」という疑問を端緒としている。そこで、本論文では、学校生活において運動部員が直面する課題への対処に彼らの競技状況スキルが果たす役割と共に、そのライフスキルへの般化を促進する指導の特徴について明らかにすることを目的とした。

2. 論文の概要

上記の目的を達成するために大きく次の3つの下位検討課題を設定し、取り組まれた。

(1) 競技状況スキルならび学校生活場面でのライフスキル尺度の開発、(2) 運動部員が学校生活において直面する課題（日常生活におけるストレス対処、部活動における競技成績、大学進学に向けた進路選択）への対処に果たす競技状況スキルの役割、(3) 目標設定スキルに特化し、社会学習理論における観察学習の学習過程に着目した（注意、記憶の保持、運動再生、動機づけ）指導によるプログラムを作成し、競技状況スキルのライフスキルへの般化（ライフスキル獲得）促進に対する実践的介入によるその効果の検討。これら3つの課題について実証的検討がなされた。

以下では、各下位検討課題にそって本論文の概要を述べる。

(1) 運動部活動及び学校生活の両場面で利用される心理社会的スキルとして6カテゴリー（目標設定、自己管理、時間管理、他者受容、組織性、他者とのコミュニケーション）に注目し、両場面において各スキルを利用する場面を想定した質問をそれぞれ作成し、種々の側面からの信頼性、妥当性の検討がなされ

た。その結果、互いに対応する2因子（個人的スキル及び対人スキル）から構成され、状況のみが異なる競技状況スキル尺度及びライフスキル尺度（各20項目）が開発された。

（2）高校生運動部員が学校生活において直面する課題として、日常生活におけるストレス対処、部活動における競技成績、そして大学進学に向けた進路選択の3つに注目し、それらの課題への対処に果たすライフスキルの役割を構造方程式モデリングによって分析検討した。その結果、運動部員が獲得している競技状況スキルはライフスキルとして学校生活場面に般化することによって、彼らが学校生活場面において遭遇する課題への対処能力を促進する役割を果たしている根拠を示した。

（3）ライフスキルにおける運動部員・非運動部員の比較、そして競技状況スキルの獲得の程度とライフスキルの獲得の関連性を確かめ、ライフスキルへの般化には、競技状況スキルの獲得程度と部活動中に指導者から受ける働きかけが影響を及ぼし、特に、個人的スキルの獲得には実践の指導が、対人スキルの獲得には価値の指導がそれぞれ最も影響を及ぼすと考えた。このような視点に立ち、運動部活動における目標設定スキルの獲得を目指したライフスキルプログラム（GSP）の試行版を作成し、高等専門学校サッカー部員を対象とする介入研究を実施した。その結果、試行版GSPへの参加を通じて、生徒は運動部活動及び学校生活場面における目標設定スキルを獲得できることを確認した。さらに、新たな対象者ならびに観察学習の学習過程（注意、記憶の保持、運動再生、動機づけ）をプログラムに明確に反映させ、試行版GSPに修正を加え、GSPへと改良した。そこで、3校の中学サッカー部員を対象とする介入研究を実施した。その結果、GSPへの参加を通じて学校生活場面における目標設定スキルが獲得可能であること、さらに時間的展望における目標指向性、希望、現在の充実感に肯定的変容が認められることが明らかになった。

3. 結論

以上の検討を踏まえ、本論文は「運動部員の競技状況スキルはライフスキルとして般化することにより、学校生活において彼らが直面する課題への対応能力を促進する役割を果たす。そして競技状況スキルのライフスキルへの般化は、観察学習の学習過程（注意・記憶の保持・運動再生・動機づけ）を反映させた指導を、運動部活動場面において実践することにより促進される」と結論した。

審査の結果の要旨

批評

本博士学位申請論文は、上野氏がこれまで長く精力的に積み重ねてきた体育・スポーツ場面でのライフスキル研究を、スポーツ経験における人格形成への「般化」可能性といった問題意識から纏めたものである。本論文の成果は、中学校や高校における運動部活動経験の教育的あるいは存在意義について、参加生徒のライフスキル獲得の可能性を支持する実証的な知見を提示し、またその促進にとって有効な指導場面での介入プログラムを開発しており、高く評価できる。また、本論文は、スポーツ経験とパーソナリティ形成といった体育・スポーツ学において未解決ともいえる重要な研究課題に対して、説得力ある説明もたらし、そして今後の研究アプローチの方向性をも示したと言える。本論文の中では、運動部活動における目標設定スキルに焦点づけたプログラムの有効性を実証したが、今後さらに他の競技状況スキルに拡大して行くことによって、より汎用性の高いライフスキルプログラムとなっていくものと期待できる。

平成27年1月13日、博士（体育科学）学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、学力の確認を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（体育科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。